
日本文学を題材とするアクティブ・ラーニング：
インターネットを活用した国際的な学術コミュニケーション
Active learning methods and Japanese Literature:
International communication through online tools

フェレイロ・ポッセ、ダマソ
FERREIRO POSSE DAMASO

本発表はアクティブ・ラーニングを促進する手法の一つである「問題基盤型学習 (Problem-Based Learning: PBL)」を、ICT ツールを活用して国内外の学生をつなげる文学教育に応用することで、これまでにない、新たな教育手法を創出する試みを紹介するものである。本 P B L セミナーは、松山由布子 (広島大学)、畑有紀 (新潟大学)、永井敦 (神戸大学) 及び執筆者であるフェレイロ・ダマソ (広島大学) の 4 人で協同し、開催した。

今までの日本文学教育は、演習形式の授業で受動的に展開されたことが多く、議論が活性化されていない。さらにいえば、日本の大学において留学生が増加しているにもかかわらず、日本文学における多様な文化的背景の理解という困難な課題についても真摯に工夫や対応がされていない。

このような状況に置かれている日本文学教育及び日本文学研究には、ICT を活用したアクティブ・ラーニング型教育という新たな試みが必要であり、本発表で紹介する内容は、その一つの試みである。

本セミナーは、国内外の大学にて日本学を学んでいる学生を対象とし、様々な ICT ツールを活用した同時双方向のコミュニケーションを用いて PBL における学生主体で行われた。また題材として、芥川龍之介著「鼻」を取り上げた。

「鼻」は芥川の初期著作のうち、中世説話を典拠とする所謂「王朝物」に分類される作品であ

This presentation describes a PBL-based active learning approach project on Japanese Literature. Informed by the existing literature on PBL, we (Yuko Matsuyama, from Hiroshima University; Atsushi Nagai, from Kobe University; Yuki Hata, from Niigata University; and myself, from Hiroshima University) designed a 2-week PBL program. A total of 8 learners in three distinct countries (Japan, Spain, and China) collaboratively studied and read *Hana (The Nose)*, a short story published by the Japanese writer Ryunosuke Akutagawa. The students also read the story Akutagawa took as the main source of inspiration, the *Konjaku Monogatari*. The main purpose of this project was to read the selected works trying to draw insight into the similarities of both short stories on the one hand and the effect Japanese modernization had in Meiji and Taisho literature on the other. Despite their limited prior exposure to Japanese classics, all the learners demonstrated a recognizable improvement in their understanding of the text.

This presentation will have the next structure: a brief explanation of what a PBL seminar consists of, followed by a concise introduction of the methodology, the design of the course, the profile of the students, and the outcomes achieved in this PBL seminar. Finally, a final reflection on the current situation of Japanese Literature education in the era of new technologies will be added.

り、その原拠として『今昔物語集』巻第 28 第 20 話ほかの「池尾の禅珍内供」の鼻にまつわる説話がある。原典と作品との関係として、古典と近代小説、近世以前と近代以降の社会、さらには明治期の文壇と芥川との関係など、様々な相剋を作品から見出すことができる。

本セミナーでは、そうした「鼻」の持つ文学的多様性を、日本学を専攻する学生のための入門教育としての PBL プログラムに落とし込み、①日本文学を題材とするアクティブ・ラーニング、②インターネットを活用した国際的な学術コミュニケーション、③海外学生への専門的な日本文学教育、などの教育テーマの実現を目指した。

本発表の流れとして、まず PBL とは何かという簡潔な説明を行う。その後、本セミナーのプログラムのテーマ、デザイン、実施方法と参加者の情報について詳細に紹介する。最後に、デジタル・情報化における日本文学教育及び日本文学研究の将来に関する考察を加える。